



8

「縁」

先代の掛け時計が寿命を迎えてから、部屋に時計がない生活が続いている。気に入ったものを見つけたら設置するつもりなのだが、なかなか出会えない。今どき時間を確認するだけならスマホで十分と考えていたが、意外と不便だ。1日に数回、時間を確認しようと壁に目をやる。そこには何も無いのに。

枕元にスマホを置かないのは、睡眠の妨げになるからだ。調子が良ければ目覚ましの前に目が覚めるし、すこし離れていてもあのけたたましい音は「早く起きろ」と耳を刺激する。無意識にアラームを止めて寝過ごしてしまう心配が減り、都合がいい。

就寝中、たまに何か得体の知れぬモノに叩き起こされ、「ヤバイ!!」と目を開け、寝起きとは思えない素早い動きでガサッと体を起こす時がある。大事な予定の前夜に寝坊しないようにと考えつつ就寝したときなどに起こる現象だが、こんなとき部屋に時計がないと焦りが倍増する。

昼寝からの目覚めは、焦りというより混乱だ。起きた直後はヤドンのごとく寝ぼけているため、カーテンから差し込む光を朝日だと認識し、「よく寝たなあ」なんて考えていたら実はまだ夕方だったこともあった。

このように、「そこに時計があったら」と思う瞬間に日常の中で出くわすのだから、とりあえずなんでもいいから時間がわかるものを調達するという手もある。しかし経験

上、とりあえずで選んだものだとしても、結果としてそれと長く連れそうことになるかとわかっている。とりあえず買ったつめきり、くつべら、手鏡、などなど。部屋にある『とりあえず』たちとは、どれも長い付き合いだ。

気に入った時計、それは見つかるのだろうか？

無駄にハードルが上がりすぎてる気がする。今日に至るまで、これでいいんじゃないかと思った時計はいくつかある。色がめずらしいもの、秒針が凝っているもの、アートなもの。でも、なにかにつけ理由を挙げて購入までいかなかった。

一応、理想像はあるのだが、『シンプルだけどデザイン性がある』、『クールな雰囲気の中に親しみやすさを感じる』のように抽象的かつ矛盾をはらんだ理想になっていて、満場一致とならない。次はもつといい出会いがあるはずだと、堂々巡りだ。

こうして不便が長引くほどに、先代を愛おしく思う。律儀にも1秒ごとに鳴る針の音が、集中したい時にやたらと耳につき、「次は絶対、無音の時計にしてやる」なんて恨んだこともあった。だが今はそれをご愛嬌に感じる。コ罗纳禍で寂しいときも、僕のそばで時を刻んでくれた。高価なものではなかったが、正確に時間を伝え続ける勤勉な時計だった。

この件についてふんぎりをつけるために、こう考えてみることにする。

『気に入ったもの』というより『縁があったもの』。
「ここで出会ったんだからキミに決めた」という思考で、
次に出会う時計を我が家に迎え入れよう！

僕は、何か事が起きた時に、「ここで出くわしたことに
きつと何か意味がある」と考える傾向がある。もっと言え
ば、「おそらくこれは必要なことなんだ」と。そう考えれ
ば、ある程度どんなことでも受け入れ、乗り越えられる気
がするのだ。

かちかちと、秒針の音が聞こえた気がした。